
りばーしぶるっ

本知そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りばーしぶるっ

【Nコード】

N0945X

【作者名】

本知そら

【あらすじ】

帰宅部だった新階湊は、「部活に入らないと小遣い減らす」と親から脅され、渋々部活を探すことになる。「楽そうだから」と選んだ図書部の部室の扉を叩くと、出てきたのは今朝自分に告白してきた竹崎朱莉だった。この話は、シスコンの姉や百合な部長に、少しだけMな男の子と田舎育ちの女の子、そして見た目がどうみても小学生なハーフの主人公の5人が、特に何をするでもなく、放課後集まってたらだらする学園コメディー。

告白されるプロローグ

高校生活二年目の春。入学式や始業式を終えた学園（正式名称、私立千里学園高等学校）は部活勧誘期間に入っていた。およそ一週間続くこの行事は、その名の通り大々的に部員の勧誘活動を行っても良いという期間で、生徒主導の行事ということもあり、年間を通して比較的大きなイベントに分類される。期間中は廊下の壁一面にポスターが張られ、校庭には立て看板が設置され、昼休みには毎日スピーカーから放送部による部活紹介が流される。どこもかしこも部活勧誘色に染められるせいで、まったく関係ない僕達帰宅部でさえ会話の端々に「部活」という言葉が出てくる始末。おかげで全校生徒が否が応でもこのイベントに多少なりとも参加していた。

部活勧誘期間に入ってから今日で五日目。今朝も校門から昇降口へと続く並木道では、二、三年生の面々が両側にずらりと並び、通学してくる新入生を待ち構えていた。その多くがプラカードを片手に大声で呼び込みをするくらいだけど、中には動物やアニメのキャラクターの被り物をしたり、部に関する簡単な余興を披露したりして、なんとか新入生の足を止めようと頑張る部も見られた。強引な勧誘は校則で禁止されているので、とにかく興味を持って貰おうと必死のようだ。

そんな朝の喧噪をはるか下に聞きながら、僕は屋上にいた。本来は進入禁止の場所だけど、屋上の扉には内側から開けることができ、簡単な力ギしかかかっていない。そのため、このことを知っている生徒からは昼寝や密会などに屋上はよく利用されていた。もちろん先生に見つかれば注意されたうえに反省文を書かされるのだけど、今までこれといった事故が起きたことがないので、先生も現行犯でないかぎりは見逃してくれるのだとか。

……っと、そんなことは今はどうでもいい。とにかく、その屋上で僕は何をしているのかと言うと、

「あたしと付き合ってくれ！」

告白されていた。

僕を手紙で呼び出した彼女の名前は竹崎朱莉^{たけざきあかり}。癖のあるセミロングの茶髪とつり気味の目、そして一七〇を超える長身が特徴的な女の子だ。竹崎さんは僕と同じ二年生で、たしか去年は隣のクラスにいたはずだ。特に接点もなかったので親しかつたということもなく、僕としては「そういう人もいたね」程度の認識度だ。

「嫌だ」

そんな他人以上友達未満の竹崎さんの告白を、内心かなり驚きながらも表面上は冷静に断った。ちよつと対応が冷たすぎる気もするけど、僕にその気は毛頭ないわけだし、竹崎さんの今後のためを思えば、はつきりと言ってあげるのが優しさというものだろう。きつと。たぶん。

その竹崎さんとは言うと、僕の返事に何も返さず、ただじつと見つめ返していた。

……いや、よくよく見ると竹崎さんはさつきからまったく動いていなかった。

「竹崎さん？」

少し心配になり声を掛けてみるものの、半開きになった口はそのまま、反応は何も返ってこなかった。

不思議に思いつつ、そのまましばらく待ってみただけど、竹崎さんが動き出す気配はなかった。

「えっと、そゆわけだから」

竹崎さんの様子が気になるけど、この場から去った方が良さそうな気がした。時計を見ればあと五分で本鈴が鳴り、ホームルームが始まる。遅刻するわけにはいかないので、一足先に教室に戻ろうと

踵を返した。

そのとき、

「待ってくれ！」

突然動き出した竹崎さんは大声で僕を呼び止めた。驚いて振り返り、目をぱちくりしていると、竹崎さんは弱々しい声で「悪かった」と謝った。

「まさか振られるのがこんなにショックだとは思わなくてな……」
思わなくて？

竹崎さんの言葉に違和感を覚える。

もしかして、竹崎さんはこれが初めての告白だとか？ その割には下駄箱にあった手紙や告白までの流れは手慣れた感じがしたようだな……。まあ僕は恋愛事に疎いからよく分からないけど。

「わ、悪いんだけど、良かったら理由を聞かせてくれないか？」

「理由って言われても……」

答えは明確。一つしかない。竹崎さんもそれに気付いてそうなものなのに、わざわざそれを僕に言えというのだろうか。

「頼む！」

「……むう」

真剣な表情の竹崎さんを見て、「断る」なんて言えなかった。

……仕方ない。

簡単なことでも、ちゃんと言葉にしないと伝わらないのかもしれない。
ない。

そう自分に言い聞かせて、渋々竹崎さんにこう告げた。

「僕、女だから」

第一話 告白を断った子が部長でした part 1

……今朝のは失敗したかもしれない。

昼食を済ませて教室へと戻ってきた僕は、朝の出来事を思い出していた。

『女だから』と振った理由を伝えたあの後、竹崎さんはこの世の終わりとも言うような酷く落ち込んだ顔をして膝をついた。「そりゃそうだよな」。ははははは「みたいな軽い答えを想像していた僕は、竹崎さんの様子に気が動転して、

『ぼ、僕達ほとんど喋ったことなく、お互いのことをよく知らないし……』

咄嗟にそんなことをいつてしまった。しばらくの沈黙の後、竹崎さんは顔を上げて立ち上がり、

『そうか……。そうだよなっ』

何故か機嫌良さげに言ってから走り出した。そして屋上の扉の前で一度振り返ると、

『じゃあまたな!』

手を振りながらにこやかに、屋上を去って行った。

よくよく考えると、あの『お互いのことをよく知らない』ってセリフは、ドラマのヒロイン（女主人公）がまだ会ったばかりの恋人（男）に告白されてパニックに陥ったときに言うような、少し恥ずかしいセリフじゃないか。もしかしたら、あの一言のせいで竹崎さんにまだチャンスがあると思わせてしまったのかもしれない。

この千里学園は数年前まで女子校だったらしく、共学になった今も女子生徒の数が圧倒的に多い。おかげで『女の子の事が好きな女の子』もそう珍しくない。現に竹崎さんがそう言う人だってことは噂で知っていた。とは言え、まさか僕自身がその対象にされるとは

思いもしなかったけど。

「さあどうしよう……」

これからのことを思い、気が重くなる。

……って今はそれどころじゃない。いやそれも十分重要だけど、それよりも優先すべきことがある。

頭を数回横に振って、無理矢理気持ち切り替える。

「どこにしまったっけ……。あ、これだ」

机の中から数枚のプリントを取りだし、机に広げる。

それらは廊下の掲示板に張り出されていた部活動誘いのポスターで、休み時間に廊下を歩いていたときに破り取ってきたものだ。掲示物を勝手に取るのは校則違反だけど、同じ掲示板にあんなに何枚もベタベタと同じ物を張っているんだから、一枚くらい良いだろう。

「さて。どれにしようかな……」

ポスターを眺めながら呟くと、机に人の影が落ちた。見上げた先には見慣れた女の子が立っていた。

高校二年生の平均的な身長に、長く伸びた黒髪を後頭部の辺りでまとめて垂らした、所謂ポニーテール。校則の緩いこの学校で、真面目に着崩すことなく着用した女子制服。

彼女は新階彩花^{しんがいさいか}。僕より十一ヶ月早く生まれた同学年の姉だ。

「どうしたの湊？ お昼に食べた四川風麻婆丼で胃が痛いのか？」

姉さんが薄ら笑いを浮かべる。

「目の前でカルボナーラ食べてたのをもう忘れた？」

そう言っただけで睨み付けると、

「喩えよ、喩え。難しい顔していたから和ませようと思って」

和ませるのにどうして痛い話をもってくるのか。

「ほら、そんな顔しないの」

「そんなってどんな？」

姉さんは「こんな顔よ」と、ポケットから手鏡を取り出して僕の眼前に差し出した。

鏡をのぞき込むと青い瞳の女の子と目が合った。もちろん鏡なの

で、それは毎日見慣れた僕自身の顔だ。

ドイツ人である祖母の血を色濃く受け継いだ僕は、生粋の日本人と変わらない容姿をした姉さんと違い、金色の髪に青い瞳、そして色白の肌と、西洋人のような容姿をしている。ただ、骨格と背丈は日本人のそれなので、ほとんどの人が初対面でも僕のことをハーフだと気付いてくれる（正確にはクォーターだけど）。そんな中途半端な容姿をしたのが僕、新階湊だ。

鏡の中の僕は今日も半分目が閉じていた。自分で言うのもなんだけど、ぼーっとしていて何考えているか分からない。とりあえず眠そうだ。

「ほら、そんな顔してるでしょ？」

「そう見えるなら、姉さんは洞察力凄いと思う」

姉さんは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「ところでさつきから何を見て唸ってたの？」

「これ」

机に広げたポスターの中から一枚を取って姉さんに見せる。

「部活？ 湊、部活に入りたいの？」

「まったく全然一ミクロンも」

全否定する僕を見て首を傾げる。

「じゃあどうしたのよ？」

ちらっと姉さんを見てから、深く深くため息を吐く。

「昨日母さんに、明日部活に入らないとお小遣い減らすって言われたんだよ」

「昨日って、あの時の電話？」

少し考えてから頷く。昨日の夜に電話したのは一回だけだったの
で、たぶん合っている。

「なんでそうなったのよ？」

「どうしてって……えーっと」

目を閉じて昨日のことを思い出す。たしか……

「ニュース番組で大学への進学率の特集をやってたみたいで、部活

に入ると内申書に良いとか、面接の時に話すバリエーションが増えるとか、そういうのを見て急に帰宅部の僕の将来が心配になったんだってさ」

「ああ、そういうこと……」

姉さんが心底理解したとでも言うように、呆れ顔で頷いた。

「ほんととママって思い込みが激しくて、心配性よね」

それには同意する。でも親というものは子供に対して誰でもそういうものなのかもしれない。そう思ったから大人しく母さんに従って部活に入ることを決めただけだし。

……バイトしてないから今よりもお小遣いが減らされるのはマズイというのが一番の理由だけだ。

「でも今から入るとしたら、選択肢は限られるわね……」

この学校では、一年以上からの中途入部を原則許可しない部がある。主に団体競技やレギュラー争いのある部がこれに当てはまる。もちろんこれは『原則』なので、理由があれば二年からでも入部することはできる。ただ、一年間帰宅部だった僕にまともな理由なんであるはずもないので、姉さんの言うとおり選択肢は限られてしまふ。

「どうせなら一年の時に言ってくればまだ選択肢が……って、それはそれで一年から部活をやったことになるからこれで良かったのかな」

一年間野放しにしてもらえたと前向きに考えるべきだろう。

「そういえば、ママは私には何も言っただけで、私は部活に入らなくて良いの？」

「生徒会の副会長してるから良いんだって」

姉さんは去年の秋に行われた生徒会役員選挙で、一年で唯一立候補して副会長に当選している。今は所属していたバレー部を辞め、周りを三年生に囲まれながら生徒会の副会長として頑張っている。

つまり姉さんも部活をしていないことになる。けれど、生徒会の副会長をしているから母さん的にはOKらしい。まあ、生徒会の仕

事が忙しくてバレー部を辞めたのだから当然のことだろう。

「ということは湊が部活に入れば、この話は丸く収まる、と」

「そういうこと」

「もう部活は決めたの？」

姉さんが机に広げたポスターを手に取る。

「えーと、茶道部に文芸部にコンピューター部、園芸部に美術部に、それと図書部か。どれもあまり聞かないところね」

それはそつだ。出来るだけ楽そつな部活をと思って、ほとんど話題に上がらない部活を選んだんだから。

ちなみに幽霊部員という選択肢はない。バレたらお小遣い減らされるどころじゃなくなるから。

「どうせならやりがいのある部に入ったら？」

「海産物？ 生臭いのはちょっと……」

「やりがいなんて貝はいないわよ……」

姉さんが睨んできたのでサツと目をそらした。

「ったく。できるだけ楽な部活に入りたいっていうのは分かるけど」

「あ、バレてた？」

「バレバレ。……仕方ないわね」

姉さんは渋々といった様子で視線をポスターに移した。

「うーん……。この中で湊に良さそつなのは……。茶道部か美術部か図書部かしら？」

「僕は園芸部と図書部で迷ってたんだけど」

「じゃあ図書部ね」

即決して図書部のポスターを僕に手渡す。

なんで園芸部がだめなんだろう。家でも花を育てているのを姉さんも知っているはずなのに。まあ、姉さんが図書部が良いというなら図書部にしよう。放課後の学校で小説を読み漁るといったのもいいかもしれない。

「分かった。放課後図書部に行ってみる」

「放課後ね。了解」

……了解？

「まさか姉さん付いてくる気？」

「当たり前でしょ」

『なんでそんなこと聞いてくるの？』みたいな目で見られた。僕には何が当たり前なのかさっぱりなだけだ。

「こんな聞いたこともない部活、変なところだったらどうするの？」

「いや、ここにただ本を読むだけって書いて」

「図書部というのは名前だけで、部室は不良の巣窟となっているかもしれないわよ？ 釘バットとかメリケンサックとかゴロゴロしてるかもしれない」

図書部のポスターに書かれた『主な活動内容』の箇所を指差して説明しようとするものの姉さんはそれを遮って、図書部の人が聞けば怒りそうな酷い妄想を語った。

「それ漫画の見過ぎ。曲がりなりに進学校」

「もしもそうだったとき、部活動を取り締まる役目を受け持つ生徒会の副会長である私がいれば湊も安心でしょ？」

「ほら、ちゃんと顧問には図書館の」

「安心でしょ？」

「……」

僕の言葉にまったく聞く耳を持たないご様子。仕方なく僕は指差していた手をゆっくりと下ろし、「そーですね」と抑揚なく答えた。

第一話 告白を断った子が部長でした part 2

退屈な授業を乗り越えた放課後、僕は特別棟最上階の四階へとやってきました。

この学校には大きく分けて二つの校舎がある。一つは毎日僕達がお世話になっているクラス毎の教室や、あまり訪れたくない職員室に保健室など、三年間で誰もが一度は訪れることになるごく一般的な用途の教室が収められた一般棟。そしてもう一つが一般棟に並び立つようにして存在する隣校舎の特別棟だ。

この特別棟には家庭科室や化学実験室などの特別教室と文化系の部活が収められている。その中でも頻繁に使用される教室が一階と一般棟と渡り廊下で繋がっている二階に集中しているため、選択科目や所属する部活によっては、三階以上に上がることなく卒業していく人もいる。僕自身も四階に来たのはこれが初めてだったので、もしかしたらこの機会を逃していれば一度も訪れることなく卒業していたかもしれない。

それにしても……と隣に目を向ける。そこには図書部のポスター片手に歩く姉さんの姿がある。

一人で図書部へと行こうと考えた僕は、ホームルーム終了と同時にこっそりと教室を出た。けれど、それを予想して廊下で待ち伏せていた姉さんにあっさりと捕まってしまった。「ついていく」という姉さんに「生徒会は？」と最後の抵抗を試みただけ、「今日は会議も仕事も何もなし」と一蹴されてしまった。

これ以上何を言っても聞かないことは妹の僕が一番良く分かっている。仕方ないので、渋々姉さんを連れて図書部の部室へ向かうことにしたのだ。

まったく、あの性格は誰に似たのか……あ、母さんか。納得。

「ここね」

姉さんが廊下の突き当たりにある教室の前で立ち止まった。

校舎内だというのに結構な距離を歩いた。これは毎回来るのが少し面倒だ。とそんなことを思いつつ視線を上げると、『図書部』と書かれた金色のプレートが目に入った。

特別棟四階の東の最奥、そこに図書部の部室はあった。

『先輩、どうですか？』

『いい。いいぞ千沙都ちさと。すげーかわいい！』

『ほ、本当ですか？ ありがとうございますっ』

特別棟は一般棟と違い、とても静かだった。放課後で部室にしか人がいないせいだろう、しんと静まりかえる特別棟の廊下にいると、目の前の部室から漏れ聞こえる声まで耳にすることが出来た。

『せっかくだ。千沙都、ついでにこれも頼む』

『これ、ですか？ ……あ、これは被ればいいのですね』

中では二人の女の子が楽しそうに会話をしているようだった。そのうちの一人がどこかで聞いたことのあるような声だったけど、扉一枚隔てているせいで声がかくもり、それが誰かまでは特定できなかった。

『……んしょ。これでいいですか？』

『文句なし！ あーこのままテイクアウトしたいわー』

どう聞いても部活動の会話ではない。先輩らしき人が下級生に何かしているのは分かるけど。

『テイクアウト？ 帰りにハンバーガー屋にでも寄るのですか？』

『ん？ ……ああ、そうだな。テイクアウトして、家でゆっくりと愛でて、それから食べてしまいたいよな』

二人の会話が噛み合っていないような気がする。

ふと隣に目を向けると、姉さんが難しい顔をして扉を凝視していた。

『姉さん、どうかした？』

『この声、どこかで聞いたことがあるような、ないような……いえ、あるわね』

姉さんも僕と同じことを考えていたことに驚く。

「僕もなんだよ。最近聞いたはずなのに思い出せなくて」

「私はそんな最近でもないかしら。……なんか嫌な予感がするのよね。思い出そうとしてるんだけど、頭がそれを拒否してるというかなんというか」

姉さんが眉間に皺を寄せる。

「別に嫌なことだったら思い出さなくて良いんじゃない?」

「そういうわけにはいかないわ。湊に関わることなんだからそれだったらなおのこと良いのに。」

言葉にはせず、心の中で呟く。きつと言っても変わらないだろうから。

『うん? 先輩はハンバーガーを「よしよし」って可愛がってから食べるのですか?』

『ああ。それはもう相手が嫌がるほどに』

『相手が嫌がる?』

『喩えだよ、喩え』

『んー?』

……それにしても、会話中に入るのは失礼だろうと思いついで待っているけど、部室の中にいる女の子二人の会話は一向に途切れる様子がない。

「とりあえず、そろそろ入る?」

「もう少しだけ待って」

目をぎゅっと瞑り眉間に手を当てる姉さん。もしかして思い出せそうなのだろうか。まあ焦る必要はないので待つことにする。

『おいおい。何か忘れてないか?』

さっきまでとは違う声が聞こえた。今度は男の子だ。

『ああ? 別に何も忘れてな。そういえば』

『ほら、これがないと魅力半減だろ? ということ千沙都ちゃん、これもよろしく』

「この声は……」

ハツとして顔を上げる姉さん。

「姉さん知ってる？」

「う、うーん……こいつも頭が思い出すのを拒否しているような……もつこここまで出てるのに」

トントンと首を叩く。

『はいはいー。ってこれはどうすればいいのですか？』

『これはな、ここにこうやって……』

『うー？　こう、ですか？』

『違う違う。俺が自分につけるから見ててくれ。これをこうして……こうだ』

『こ、こうですか？　あれ？』

『ちよつと貸してみ。これをここにこうして……』

「ああ……やっと思いついたわ。あの二人、ね」

絞り出すように言った姉さんの目は細く、眉と口の端はピクピクと痙攣していた。

「ねえ、湊。今からでも部活変えない？」

「どうやら姉さんのあまりよろしくない人達らしい。」

「今更変えるのはちよつと遅いかなあ。今日中に決めないといけないのにもう放課後だし」

まあ一番の理由は単純に『めんどい』なんだけど。

「何を思っただしたのかは知らないけど、ここじゃなくて別の部活なら百パーセント大丈夫っていう保証もないんだしさ、別にいいんじゃない？」

「い、いえ。その、なんとというか、あいつに湊を会わせるのは危険なのよね……絶対あいつの好みに……」

何故か少しずつ声量を下げるせいで後半の方はよく聞き取れなかった。とにかく、僕を二人に会わせたくない、そういうことだろう。だが断る。面倒だから。

「……まあいいわ。私が湊を守ればすむことなのだから」
「守るって大げさな」

小馬鹿にするように笑うと、姉さんは「笑って済めばそれでいい

のよ」と、遠い目をして呟いた。

『あ、そうするんですね。なるほどです』

部室の中ではまだ何かしているようだった。

『……ひゃ！？ に、西森先輩どこ触ってるんですか！？』

悲鳴？ 反射的に体が前に出たけど、姉さんに手で制されて踏み

とどまる。見上げる僕に姉さんは「大丈夫」と言った。

『あー悪い悪い。ちよっと手がすべった。ははは』

『そ、そうですか。それなら仕方ないですけど……』

『うん。そうだな。よし、死ね』

『そうだなって一体お前は何に納得し え、おま、ちよ、待て、

待てって！ 襟首掴んでホールドするなって！ そんで右手を振り

上げるなって！』

『いや、こうでもしないとお前逃げるだろ？ 安心しろって、すぐ

に楽にしてやるから』

『笑ってるのに目が本気過ぎてこええ！ 助けて千沙都ちゃん！』

『せ、先輩落ち着いてくださいっ』

……なにやら中が物騒だ。

「ったくあの二人は……。行きましょう。あいつなら手を出しかねないし」

僕が頷くのを見てから扉をノックする。

『は、はい。先輩、人が来たみたいですから、大人しくしててくださいいね？』

『入部して三日とは思えない立派な言葉。やはり千沙都ちゃんを入れて正解だったなあ……』

『あたしはお前を入れたことを後悔しているところだけどなっ』

『ちよ、おま、首、首が絞まる！』

『そりゃ首締めてるんだから当たり前だろ？』

『いやそんな心底不思議そうな顔されても！』

『もつつ、先輩方やめてください！』

……扉が開かない。

ちらりと姉さんを見ると、ギリリと歯を噛みしめて部室の扉を睨んでいた。

「ま、まあまあ姉さん落ち着いて」

「いたって冷静よ私は」

姉さんは青筋を浮かべながら笑ってみせた。どう見ても冷静とは言えない。

「……別に私はいいのよ。ただ湊を待たせるのは許せない」

どうしてそこに僕の名前が出てくる。

「いや僕は別になんとも思っていないし」

「湊は良くても私はダメなの」

「それどういう理屈」

「入るわよ!」

僕が言い終わる前に姉さんは一声かけてから扉に手を掛け勢いよく開いた。

第一話 告白を断った子が部長でした part 3

「あんた達、いつまで待たせ
あつ」

中にいた三人の声が綺麗に八モる。

「……………」
部室に足を踏み入れた姉さんは、目を大きく見開いたままびたりと動きを止めた。姉さんより幾分マシだった僕は部屋の中にいた三人に視線を向ける。

扉の近くには猫耳と尻尾をつけて黒いドレスを着た小柄な女の子が一人。会話の様子から、おそらくこの子が一年生なのだろう。その奥では制服姿で猫耳、尻尾をつけた男の子が長身の女の子に襟首を掴まれていた。

……………図書部？ とりあえず、猫耳やドレスが図書部にはまったく関係ないものだと言うことは部外者の僕でも分かった。

「あれ、彩花に湊じゃないか。どうしたんだ？」

男の子の襟首を掴んでいた女の子が僕達を見て言った。って、よく見るとその子は竹崎さんじゃないか。

「竹崎さんこそ、どうしてここ」

「なんで朱莉がここにいるのよ？」

……………なんか今日はよく姉さんに邪魔されている気がする。

「もしかしてその下級生を廊下で見つけて後を追ひ、部室にたどり着いたところで彼女を上手く騙し、その校則違反な服を着せて遊んでいたのかしら？ さすが同性愛者ね」

姉さん妄想し過ぎだよ。言葉も刺々しいし、明らかに竹崎さんを挑発している。

「お前な、あたしとしてはそっちより百合って言葉が気に入ってるんだから百合って言えよ！」

前半スルーしてそこをツッコむんだ。

「図書部の部長が部室にいるのは当たり前だろ？」

「あんたが図書部の部長？ 信じがたいわね。そんなことより、あんたなんで湊のこと知ってるのよ？」

「これでも本はよく読むんだよ。ほとんどラノベだけだな。湊のことなら一年の頃から知ってるっての。こんなに小さくて可愛い子、あたしが知らないとも思ってたか？」

小さいは余計だ。いや、可愛いも余計だけど。

「やっぱり……なんとなくそんな気はしていたけど、あんたって口リコンの性癖まで持つ変態だったのね」

……姉さん。今の言葉、僕のことを間接的にいじめてない？

「自分と同世代なのにそうは見えない小さな女の子がストライクゾーンなだけだ！ その変態と一緒にするな！」

竹崎さんは隣にいる男の子 たしか西森さんって言ってたっけ、を指差した。反応を期待してか、竹崎さんと姉さんが西森さんに視線を送る。

けれど西森さんは無反応だった。よく見ると西森さんは僕の方に視線を向けていた。何かあるのかと振り返ってみただけ、後ろには開け放たれた扉と誰もいない廊下が見えただけだった。

何を見ているんだろっ。

「……え？ あ、なんか言ったか？」

やっと西森さんが反応を示し、二人に交互に視線を送る。

「……あんた今なに見てた？」

姉さんが西森さんに詰め寄る。

「い、いや別に何も見てないぞ？ 別に彩花に妹がいたことに驚き、さらにその子がすげー可愛くて見とれていたとか、そんなことは決してないからな！」

顔の前で両手をぶんぶん振りながら顔を赤くする西森さん。うん、とりあえず今の言葉は聞かなかったことにしよう。

「ねえ朱莉、あんたの同類のこいつ、なに口走ってんの？ 普通こは誤魔化すところでしょ？ 正直に言われちゃ私が反応しづらい

じゃない」

「だからあたしはロリコンじゃないっての」

「五十歩百歩よ。……ああそつだ。ないと思うけど、一応聞いとくわ。あんたまさか、もうすでに湊に手を出したりしてないでしょうね？」

姉さんがやけに僕と竹崎さんの関係を気にしている気がする。いや、どうみても気にしてる。

「別に手は出してないけど、今日の朝に
っ！？」

頭で考えるよりも早く竹崎さんに向かって走り出していた。数メートル先にいた彼女に駆け寄り、僕よりも頭一つ分背の高い彼女の口を両手を使って無理矢理塞いだ。

「……告白の事喋ったら、金輪際口もきかない」

背伸びして、できるだけ声を低くして耳元で囁いた。

さすがに朝の出来事を姉さんに知られたら面倒どころじゃない騒ぎになる。

僕の鬼気迫るものを感じてくれたのか、竹崎さんはごくごくと素直に頷いた。

「湊、突然どうしたの？」

「え、えーっと……た、竹崎さんに入部することを伝えただけどっ？」

竹崎さんが驚いた顔で僕を見る。

「え！？ そうな いだっ！」

姉さんから見えないところで竹崎さんの腕をつねる。それと同時に『話を合わせる』と目で訴える。

「あ、ああ。今湊からそう聞いた」

「ふーん。でもさっきやけに慌てて朱莉の口を塞いでたような……」

「あ、あーそれは……ほら、竹崎さんに喋られるとスルーされるかもしれないでしょ？ だからちよっと黙って僕の話聞いて貰おうと思っただよ」

……む、無理矢理過ぎる。内心冷や汗ダラダラだ。姉さんも腑に落ちないようで怪訝な顔をしている。けれど聞き返しては来ないよ
うで、腕を組んで唸るだけだった。

よし、このまま進めてしまおう。
竹崎さんを肘でつつき先を促す。

「そ、それじゃこの紙にクラスと名前を書いてもらえるか？」

竹崎さんから『入部申請用紙』と書かれたプリントを受け取ると、
部屋の隅に置いてあった机に座り、必要事項を記入する。

「朱莉」

「な、なんだ？」

入部申請用紙に名前を書くふりをして、二人を盗み見る。僕も竹
崎さんも姉さんの次の言葉をドキドキしながら待つ。

「申請用紙、私にも頂戴」

「……は？」

手を差し出す姉さんに、ぽかんと口を開けて呆けた表情を返す竹
崎さん。予想外のことに、僕自身も呆気にとられる。

「申請用紙。私も図書部に入部するって言うてんのよ」

「あ、ああ、入部か。でもどうしてだ？ お前副会長忙しくて一年
の頃バレー部辞めたんだろ？」

竹崎さんから入部申請用紙を受け取ると「ありがと」と姉さんは
言うて僕の隣で申請用紙に記入し始めた。

「実はそこまで忙しくはないのよね。むしろ暇。バレー部辞めたの
は、ぶつちやけ飽きたからなのよ」

そんなこと初めて聞いた。母さんに『生徒会が忙しいからバレー
部辞める』と言うてたのを聞いていたからずっとそう思っていたの
に。あれは建前だったのか。

「ああ、そういえば毎日『練習がしんどい』って言うてたな。って
そんな理由で辞めたのかよ!？」

「重要な事でしょ？ なんでしんどいことを毎日毎日飽きもせず繰
り返すのよ。ただのDMじゃない」

「おいその発言は全国の高校生を敵に回すことになるぞ……」
「政治家じゃあるまいし、実害なければいいでしょ。はい、申請用紙」

僕より先に書き終えた姉さんが竹崎さんに申請書を渡す。

「ん？ 彩花。お前名前間違ってるぞ？」

竹崎さんが申請用紙をペシペシと叩く。

「『新階湊』って書いてるぞ」

「え、そんな訳……本当ね。すぐに直すわ」

姉さんはひったくるようにして申請用紙を取るとすぐに書き直した。

姉さんに続いて僕も書き終えた申請書を渡すと、竹崎さんは申請書に目を通し、

「……よし。これで湊と彩花は晴れて図書部員だ」

すんなりと僕と姉さんの入部を許可してくれた。

「私の気分は晴れてないけどね」

姉さんがぼそつと呟いたけど、なんか面倒だったので聞こえないふりをした。

第一話 告白を断った子が部長でした part 4

「とりあえず部員の紹介だな。先に言っておくけど、ここにいるので全員だから」

言われなくても、なんとなくそんな気はしてた。

「まあ、そりゃそうでしょうね。二人も変態がいるんだし」

姉さんも同意見らしい。さすがに二人のせいだとは思わないけど。「まあ二人とも知っているとは思うけど、一応あたしから自己紹介な」

そんな姉さんの言葉をさらっと流す竹崎さん。

「あたしは二年F組の竹崎朱莉。さつきも言ったように図書部の部長をしている。好きなものは小さくて可愛い同世代の女の子。嫌いなものはとくになし。去年は彩花と、その康司と同じクラスだったから二人とは入学当初から顔見知りだ」

『同世代の女の子』のところを力強く言いながら僕と黒いドレスを着た女の子に視線を送る。そんなことされると逆に疑わしい。

それにしても、なるほど。姉さんが二人のことを知っていたのは去年同じクラスだったからなのか。

「俺は二年E組の西森康司にしもりこうじ。よろしく、湊さん」

西森さんは微笑みながら手を差し出してくる。それに応えようとすると、

「変態は湊に近寄らないでくれる？」

姉さんが間に割って入ってきて、握手をすることができなかった。

「さつきから俺のことを変態変態って、一体俺のどこが変態なんだよ」

「そういうセリフは、せめて猫耳と尻尾を外してから言ったらどう？」

「ん？ ああ忘れてた」

西森さんは猫耳と尻尾を取り外して、再度僕に笑いかけた。

いや、今更好青年ぶられても手遅れなんだけど……。

「あとそれと湊のことを軽々しく呼ばないでくれる？ さっき言い忘れたけど、朱莉、あんたもよ」

姉さんが竹崎さんを指差す。

呼び方なんてどうでも良いのに。

「そんなこと言われてもなあ。じゃあなんて呼べば良いんだよ？」

「新階」

「それだと彩花と区別つかないだろ？」

竹崎さんの言葉に、姉さんはしばらく考える素振りを見せてから、

「じゃあ、新階湊」

「フルネーム！？」

「姉さん。それだと僕だけのけ者みたいで嫌なんだけど……」

「うっ……」

姉さんが小さく呻いて僕を見る。

「……仕方ないわね。好きに呼びなさいよ。そのかわりに、湊もあんな達のことを名前で呼ぶから。いいわね？」

「ああ」「全然オツケー」

たけざ　朱莉さんと康司君が頷く。若干勝手に話を進められたけど、まあいいか。

「その一年生もよ。この二人に遠慮しなくて良いわよ。もちろん私達にも」

「は、はい」

突然話を振られて緊張した様子の一年生。

ちなみに学年は胸元につけた校章の色で分かる。今年だと、一年は白銀、二年は黒、三年は銀だ。彼女は白銀の校章をつけていたから一年生というわけだ。服はドレスに着替えていたけど、律儀に校章はつけていたから助かった。

「流れるに次千沙都の自己紹介な」

朱莉さんに促されて、一年生　千沙都ちゃんが自己紹介を始める。

「はい。えつと、い、一年A組の比与森千沙都ひよもりぢまこつていいいます。み、三日前に入部しました。好きなものはぬいぐるみ、嫌いなものは虫です。よろしくお願いしますっ」

慌てた様子でぺこつと頭を下げる千沙都ちゃん。黒髪をサイドでまとめ垂らした、所謂サイドポニーテールが特徴的で、よく見ると僕と身長がそう変わらない小柄な女の子だ。

……若干彼女の方が高いような気がしないでもない。

「湊の方がどうみても低いわよ」

姉さんが耳打ちする。

「人の心を読まないでくれる？」

軽く睨むと、姉さんは「はいはい」と言って一歩下がった。

「次は僕かな。僕は二年I組の新階湊。そこの新階彩花の妹です。妹と言っても、生まれが少し遅いだけで、同じ二年です。良く眠そつって言われますけど、これが普通なので気にしないでください」

「あ……そ、そうだったんですね」

驚いた顔をして千沙都ちゃんが僕を見る。彼女の手には枕が握られ、よく見ると近くに簡易ベッドが置かれていた。まさか僕がずつと眠そつにしていたから、この後すぐ眠れるように用意してくれたのだろうか。

……でもなんで部屋にベッドがあるんだ？

「最後は私ね。私は二年I組の新階彩花。湊の姉よ。一応忠告しとくけど、朱莉と康司は湊に近寄らないように。もし近寄ったら足にロープ括り付けてそこの窓から放り投げるからそのつもりで。千沙都ちゃんは湊共々、仲良くしてね」

「は、はい。よろしくですっ」

少し緊張した様子ながらもそう言っただけ微笑む千沙都ちゃん。

「ははは。その窓からじゃ壁にぶつかってバンジーにはならないぞ？」

何がおかしいのか、朱莉さんは笑っていた。

「ははは。……冗談だよな？」

対照的に気後れしている康司君。

「あれ、康司、お前Mじゃなかったのか？」

途端に康司君が僕に視線を送る。話を振られるのが嫌だったので目をそらしながら一歩下がる。

「ち、違うからな！ 俺は時々罵倒されるのが気持ちよくなるだけで全然Mじゃないからな！？」

……。

「……ツンデレ？」

「違うと思う」

僕の言葉に朱莉さんが首を横に振った。

「えー……それはつまり、痛いのは嫌だけど、罵られるのは良いってこと？」

姉さんがこめかみの辺りを押さえながら康司君を睨む。

「ああ、そうだな。全部が全部じゃないけどな」

自信満々に言うことじゃないと思う。

「ねえ朱莉。こいつ退部させられないの？」

「なっ、彩花なにを！？」

康司君が驚愕に目を見開いて姉さんを見る。

「さすがにそんな理由で退部はさせられないからなあ……我慢するしか」

「仕方ないわね……防犯ブザー用意すればなんとかなるかしら」

姉さんがぶつぶつと呟き始める。その横で康司君が「防犯ブザーって……」と落ち込んでいる。

「で、入部したのはいいけど、いつもあんだ達なにしてるの？」

「別になにも。たまに図書館からお呼びがかかったときに本の整頓を手伝うくらいで、あとは部室で本読んだりしたらだらしってるな」

「感想文書いたり、お互いが読んだ本を紹介したりとか、そういうこともしてないの？」

「読んだ本でお勧めの物があれば勧めたりもするけど、部としてそれを定期的にやれているかと言われると……」

朱莉さんは腕を組んで考え込んでしまった。

「ああもう分かった。つまりほとんど何もしてないのね。……まあそっちの方が都合が良いか。私には生徒会の仕事があるわけだし」
だからそこまで無理して入らなくても……と僕が言っても無駄なんだろうなあ。

「ところでさつきまであんた達はなにしてたの？」

「うちにゴスロリな服があったから、千沙都に来て貰ってたんだよ」
聞いたことはあったけど、あの服がゴスロリというものなのか。
近世ヨーロッパの貴族のような、黒を基調としたレースやフリル、リボンがあしらわれた豪華なドレス。実際にこの目で見たのは初めてだ。

僕の視線に気付いた千沙都ちゃんがきよとんとした様子で僕を見つめ返した。一応先輩ということで安心させるように微笑むと、慌てて俯いてしまった。

「本当、まったく図書部とは関係ないわね……」

呆れたように姉さんがため息を吐く。

「そうだ。もう一着あるんだが、湊着てみな」

「嫌だ」

言い終える前に即答する。

「そ、そうか……」

告白された時と同じ言葉を使ったせいなのか、ただ断っただけなのに朱莉さんは落ち込んでしまった

「湊に断られて落ち込んでやんの。あははは！」

何も知らない姉さんが朱莉さんを見て笑った。

そんなこんなで、僕と姉さんは図書部に入部することになった。とりあえずこれでお小遣いが減らされることはないだろう。

明日からはなにか本を持ってこないと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0945x/>

りばーしぶるっ

2011年9月27日13時36分発行